「北方左連」について

近藤龍哉

はじめに

中国左翼作家連盟（以下「左連」と略す）の研究（著者評価）は、今日までいくつかの大きな節目を経験してきた。胡風批判・「反共期」・反右派闘争・調整期・「文革」期・「四人組」打倒後と、それは政治的・大事件の影響をもろに受けた揺れ動いたといえる。中国共産党（以下「党」と略す）と魯迅というかわらぬ二つの座標軸によっては、あたかも虚構にすぎなかった如く、その度ごとに崩壊の度を増していったように思う。「左連」の運動に一定の指導的役割を果たしたはずの胡風や丁玲の評価に触れることになり、国防文学論争をめぐる評価の問題に帰結している。

「北方左連」研究は、どうもその段々にあらかじめ与えられた一定の枠の中でのみ行われていた感がある。
年代の初頭のほんの一時期を例外として、当事者たちが固く口を絞せて来たのには、恐らくそれなりの理由があったことだろう。

「文革」は大いなる悲劇ではあったが、完結して語られる過去の「物語」を打ちこむという点に限れば、一定の役割を果した。確かに最初は、恣意的な別の「物語」に取り換えられただけではあったが、すでに「物語」に対する信仰が打ち砕かれつつあった状況の中で、一部の例外的狂信を除けば、全体として、事実の探索の必要へと人々を導くという企図から全く自由であったと保障できるわけではなかった。そのことも事実の発掘の動機には、そうした面がしばしば見られるものだが、たとえいかなる「物語」が作られようと、事実の発掘が継続する限り、意図的に作りあげられた筋書きなどもろいものとなる。

「四人組」打倒後の実事求心の方向での進展は、実に目を見張られるものがある。中でも、回想記（回憶録）と伝記、及び資料を中心に掘えた「新文学史料」の創刊は、証言できる人々が「文革」を経て激減し、尚かつ高齢に達している現在、まことに時宜を得た試みであり、まさに文学史研究の宝庫となりつつあると言っても良い。

かつての左翼の中でしか触れられなかった「左翼」に関する証言は、様々な立場から、様々な覇区を打ち破り、行なわれはじめたように思う。半世紀を経ての「左翼」の回想は、間に長い空白の期間を挟んではいるものの、これに反撃された自己の体験への愛着に支えられたものであるが故に、本来な
「北方左連」について

北方左連については、子どもたちの回想や、北方左連の活動についての記録が存在する。北方左連の活動についての記録は、子どもたちの回想や、北方左連の活動についての記録が存在する。北方左連の活動についての記録は、子どもたちの回想や、北方左連の活動についての記録が存在する。
名称について

前述のように、北平における「左連」について回想記の記述は実に閲覧が多い。いつ成立したのか、その正式な名称は何か、上海の「左連」ということができる関係にあったのかどうかをとっても一定しない。半世紀以上も昔のことを記憶によって辿るなどということがそもそも大変困難なことであるのは誰もが認めよう。半世紀以上も昔のことを記憶に自体に相当の意味があるのであるが、だからそれらを前提にした上ででも一種の不可解さが残る。上海の「左連」成立に関する回想記の類いの事実認識にも同様の相互に錯綜し矛盾する点があるのは私も知っているが、それらと比べてもあまりに遅すぎる。本稿では、北平での「左連」の成立に関しても述べた上でも一種の不可解さが残る。上海の「左連」成立についても考察したい。そこでまず名称に関してだが、本稿では「北方左連」を用すことにする。不思議といえば不思議な話だが、実は名称からして諸説に分かれるのである。約六十年間存続した組織であるか否か、時期により（実体の変化にともない）名稱が変化することはあるうことである。まず文献的に確認できるところを明らかにしておく。

(1) 一九三二年三月の「左連」の決議によれば、北平と天津に「左連」の支部（原文「支部」）のあることが明記されている。

(2) 一九三四年一月の「左連」の活動計画書の中に、北平に「左連」の支部（原文「分盟」）のあることが明記さ
一九三六年一月には、北平の「左連」はすでに解散し、『北平作家協会』が成立している。

「左連」は一九三二年以降、一九三六年前半だけを問題とするだけならば、「左連」の支部として扱っても良いという論理は、一応成立たつ。

だが回想記はその名称を統一されておらず、(1)北方左翼作家連盟（北方左連）(2)左連などが用いられており、とりわけ(1)、(2)との間には、組織の性格に関して重大な分岐があると思われる。

a. 北方左翼作家連盟

この名称を正式名称であると主張しているが、乃至はとにかく回想記等で使用しているのは、孫席珍、楊鍾如ら成立の時期からのメンバーが多い。楊は次のようによくしている。

（準備の）会の席上で「中国左翼作家連盟北平分盟」の名称を主張するものもいたが、上海左連と連絡をとっていないことを考えると、どうして分盟をなすことなどできない。その上、この活動は党の北京市委員会（中略）の指導するものなので、最後に北方左翼作家連盟とし、後で天津・保定・唐山・太原・濟南などを包括する用意をしておくことに決定した。

これを次三点に整理要約しておこう。⑴上海の左連と連絡を取っておらず、かつての支部を名のれないと。⑵北方の都市で活動を拡大することを想定している。

「北方左連」について
同様く北方左連を主張する孫席珍は、準備の段階で名称について何度も論戦があっただことを記した上で、「左連と正式の連絡を持っておらず、その同意をとりつけていないので都合が悪い」と述べた。さらに、「彼は普通「左連」を使用しており、彼にとっては、それがごく自然に北平での左連を意味していたということらしい。彼の北平左翼作家連盟の意で北平左連というのはある。」

中国左翼作家連盟北平分盟（北平左連）

b. 中国左翼作家連盟北平分盟

北平分盟を主張するのに陳北鍾がいる。彼は前二者と異なり、何れに一九廿四年に執筆している、発表は前二者と同様に『新文学史料』第四輯（一九廿六年）。彼は成立の日時を一九廿年九月八日と特定し、北平左連の「行動綱領」に引用している。彼は結論において他の回想記の追憶を許さぬものがある。しかし陳は次のように記している。

中国左翼作家連盟は一九廿年三月ニ上海で成立した。中共中央六期代表大会以後の指導機関が上海に置かれた。
かれたので、中国左翼作家連盟も上海を中心とした。そこで中国左翼作家連盟北平分盟（北平左連と略称する）

ここに、上海に在る中央の指導機関がある以上、文化団体である左連の中心も上海に成立するのは当然であり、

「左連」が上海で成立した理由についての陳北鶴の説明は、実に奇妙な感じがする。左翼文学と深くかかわりながら、左翼文学を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可缺であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもって不可欠であり、その後の活動についても、上海における文壇ジャーナリズムが左翼文学と深くかかわっている。左翼文学者を内容として成立してきた左翼文学は、革命文学論争と魯迅の存在がまずもて
丁景唐はこの文献の発表に際し「九七五九年」の「新文学史料」第四輯の「左連」の特集にすでに目を通しているのだが、「ここ数年」、北平「左連」の名称、日時、成立時の情動、執行委員の名簿などについて、過去の諸説紛々だった問題ははっきりとし、丁景唐には異なったいい方存在した。今この貴重な文献史料の前で、過去の諸説紛々だった問題ははっきりとした。現在にもあたり私も今後しばらくこの文献を利用させてもらう予定である。他に回想記の内容と関係があるものを、確かに書くべきことがあるのである。ということは、本史料の出現後も、回想記の諸説紛々は止まらないのであり、回想者のみならず、研究者たちは、必ずしもこの文献に依ってはっきりと
しなかったらしいのである。私はこの文献に依拠して書かれたと思われる北方左連（依拠すれば北平分盟とかくべき）であるが、の記事を一つしか知らない。

「はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしれない理由について／はぎりしないのである。

現在の文献についてあらゆる難点をいえば、当然のことながら、オリジナルではなく写しであることも、どう写された

も一样次通りに書かれた Impress のこと、抄録者幸栄について明らかでない

についての唯、有名な人物がある」とのことであり、著者後を指すのか、「左連」北海道の地の命名について、特別の命名が行われている。ただし、北方の三派は、北海道左翼作家連盟は、中国左翼作家連盟北海道分盟と、とおども詳しく北平分盟の名前が使われている。

此の理論の語が、北海派の理論の語であることを示している。左連＝北海派と左連＝北平分盟の二字の名称

が同一文献上に並存するわけれ、これを一体何考えれば良いか。ごく普通に受けとれば、北海派と北平分盟を包

一九
東洋文化研究所紀要 第九十七冊

括する広い概念として矛盾することなく理解できそうである。しかし、そうだとすればなぜこの二つの名称の関係についての説明が一言も無いのか。これは不自然というほかはない。理論的論争は引用文であるからこの中に北平西部という名称が存在することは事実のあまりに思える。北平西部の準備経験が報告されたあることにもそれを補強しているらしく、一方、北平西部の準備経験が記されている部分は、どちらも記録者が読者に対してする説明の部分である。現在の準備経験は記録者の主観を加えにくいので、それだけ客観的に事実を表現しているとも考えられる。これは左運北方部と北平西部が統合されているという自明の問題として、まずはこう考えておくことにする。繰り返して広く、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時、文化都市北平で文学組織が生まれようとする時。
北方左連を用いることにする。本人たちの主体的見解とは反対に、対外的には（組織上の必要から）北平分盟を形式的に正式名称として用いた可能性を否定するわけではないが、これでは確かな判断ができない。そこで、『北方左連』についての年表を列挙するに至った。

北方左連の成立時期について

今日の研究者による成立時期についての記述を、その時期の若しものから順に並べてみよう。

一九三〇年九月十八日
上海師範学院図書館資料組
芸資料叢刊 第五輯、一九八〇年二月

一九三三年五月
馬良春、張大明『左連大事年表』紀念与研究 第二輯、一九八〇年三月

一九三〇年二月
張大明、王保生『三十年代左翼文芸大事記』（中国現代文芸研究叢刊）一九八〇年第一輯、一九八〇年一月

一九二九年九月
浦村『中国左翼作家連盟』（中国現代文芸研究叢刊）一九八〇年第一輯、一九八〇年三月

みな通り、各研究者の見解がかくも不一致なのは、この問題がいまやっと研究の端にいたばかりだということを語っている。個人の記憶である回想記を多くを依拠したならばならない今日の情況では、拠った回想記で異なった結論に達してしまう。回想記相互の比較検討はなされているに違いないが、今のところ決定的に有力な説が存在しない。
東洋文化研究所紀要
第十七冊

町田民子

一九二一年十月・雲南省昆明に生まれ、一九三一年冬から翌春にかけて、北平『世界日報』の副刊を編集、許晴湖と『活路文学』のスロー・ガノン、プロ文学の語呂あわせを唱和して北方左連に注目され、一九三二年春、北平中法大学在学中に『北平左連』に参加、常任委員、出版部長などを経験した。一九三三年国民党に逮捕され南江に送られ、一九三七年抗戦の開始にともなう救出活動により出獄し、武漢へ行き抗敵演劇隊に参加し、第六隊の隊長となる。一九四一年に解放区へ入り、四三年入党、五〇年出身の雲南に帰り、省宣伝部、文化局長、文連党組書記などを務めたが、『文革』で長期間、軍事管区に監禁された。『文革』後、中国作家協会雲南分会の主席になったが、八三年一月、一九六日昆明において七十三歳で病没した。
陸は私腹の限り、最も早く回想記の中で『北平左連』を攻撃の模様を書いている。これについては、後に魯迅の研究家である朱正から数点にわたる論説が提出されている。その点については別に述べることにし、ここでは、一九二七九年七月、北京を遙かに

(1) 陸万美の回想について

(2) 陸万美は一九一六年八月、雲南省昆明に生まれ、一九三一年冬から翌春にかけて、北平『世界日報』の副刊を編集、許晴湖と『活路文学』のスロー・ガノン、プロ文学の語呂あわせを唱和して北方左連に注目され、一九三二年春、北平中法大学在学中に『北平左連』に参加、常任委員、出版部長などを経験した。一九三三年国民党に逮捕され南江に送られ、一九三七年抗戦の開始にともなう救出活動により出獄し、武漢へ行き抗敵演劇隊に参加し、第六隊の隊長となる。一九四一年に解放区へ入り、四三年入党、五〇年出身の雲南に帰り、省宣伝部、文化局長、文連党組書記などを務めたが、『文革』で長期間、軍事管区に監禁された。『文革』後、中国作家協会雲南分会の主席になったが、八三年一月、一九六日昆明において七十三歳で病没した。
陸は私腹の限り、最も早く回想記の中で『北平左連』を攻撃の模様を書いている。これについては、後に魯迅の研究家である朱正から数点にわたる論説が提出されている。その点については別に述べることにし、ここでは、一九二七九年七月、北京を遙かに
東洋文化研究所紀要
新七十七冊
一九四

行きは、この傾向を総すに大きな意味を持ったとしている。一九三三年中、左連の活動は極めて尖鋭激烈であったと

も言え、この流れの変化を理由づけるものとして、一つに鲁迅との接触を置いているのである。今回の回想では、一九三三年陸自身が上海へ行き、「左連」がすでに「関門主義」を清算していることを見ず、左連の影響を大きく評価し、自身の体験ともかかわって、「左連」の影響を好ましいものとする視点である。

洪霊菲は、林伯修・戴平等と我々を約し、「我々」月刊を出した早から革命文学派の作家であり、「左連」の成立に際しては、発起人及び七人の常任委員の一人に数えられている人物であるから、彼の提起により北方左連が成立したというならそれはありの意味も出てくる。なるほど洪は、党中央から派遣されて、北平で活動し、北平の李大釧の読者の家で逮捕され、民族党により殺害されたとされている。

陸のいうのが事実だとはすれば、洪は少なくとも北方左連の成立よりも前に北平に来ているか、その指導的役割を持つ位置にいなければならなかった。だが、そのときにないことに、洪が北平に派遣されたのは一九三三年春であると一九三三年春であると一般には認め
「北方左連」について

北方左連は、北方の左翼連合組織を指す。この組織は、1930年代の日中戦争前後を中心に活動し、中国共産党の指導下で創設された。北方左連の活動は、地元の農民や労働者を対象に、反日闘争を展開していた。

この組織については、孫席珍の回想記にもふれられ、彼は北方左連の活動を経験した経験の中から、その重要性や影響力について語っている。

北方左連の組織は、北方の地域を基盤に、抗日闘争を推進するための重要な役割を果たしていた。しかし、この組織の存在は、国共内戦の背景にも関わっており、その活動は国共内戦の前後においても続けられた。

この組織の活動は、中国共産党の指導下で行われており、その活動内容も、中国共産党の戦略に沿って進めてきた。このような背景から、北方左連の活動は、中国共産党の戦略に深く関与しており、中国共産党の活動を支えてきた。

しかし、北方左連の活動は、戦後の政治環境の変化に伴い、急速に縮小され、最終的には、中国共産党の指導下で組織は解消され、その活動は終了した。

このように、北方左連は、中国共産党の指導下で活動し、抗日闘争を推進した組織であったが、その活動は、中国共産党の戦略に深く関与しており、中国共産党の活動を支えてきた。
東洋文化研究所紀要
第十九冊
一六

（2）

孫席珍の回想について

孫席珍は一九○六年六月、浙江省紹興県平水郷生まれ。十六歳の時、中学を卒業すると北京へ出て、夜は報労副刊の校正をし、昼間北京大学に学んだ。趙景深・焦菊隠・于毅夫・蔡元培らと総決算をつくり、京報文学週刊の編集にも参加した。三〇二〇年の後、愛国の青年運動に参加、三一八後広東へ行き、林伯渠に従って北伐に参加、武漢時代総政治部祕書を加え、南方革命軍日報南昌版を編集・南粤烽起に参加した後、地下運動に転じ、日本に亡命していたことがある。一九三一年から三七年まで北京師範大学、北京大学女子文理学院講師や、中大文学・東北大学教授を歴任した。

孫は北平左連の全時期を通じて参加したという自負があり、今日も北方左連の全盛をさもめることに意欲的である。先に彼の回想記に対する印象を述べたように、北方左連の活動は北方左連の活動が未だ yayımlけない明るかにしようとしている。一方左連にんならかの関連をもつすべての人物を顕彰し、それらの人々の活動を北方左連の活動として認めしようとする傾向が強い。前にも述べたように、北方左連が公然と語られるようにになって日浅く、その研究はまだ草創期に
係は君はどうじゃないか。適当な人がいないんだ、と言った。私はしばらく考えて、「それでも常任委員を数人選んで、引用が長くなったが、さびれる北文壇に左翼文学の声をあげようと準備する人々の熱気やとまどいか伝わってく

た。彼はちょっとためらったが、「よかろう」と言ってそそくさと帰って行って、

東洋文化研究所初稿 第九十七冊

一八

集団指導の方がいいだろう、と言った。彼はちょっとためらったが、「よかろう」と言い

なら孫に書記をやって欲しい。具体的な仕事は楊剛にやってもらうのだ。北文連創立の責任者、潘訓の起草した綱領と章程（規約）を一

緒に検討し決定したという。この準備期間中、準備委員長として李守章も少なかからぬ貢献をしたという。さて、会は

北方左連の正式な成立の日時ははっきり覚えていない。いずれにしろ、三〇年の年末以前（或は一九三一年の初

場）である。成立会では、章程と工作綱領を批准し、潘漢年、台靜農、劉尊棋、楊剛と私が常任委員に選ばれ、

一人が書記を兼任するほか、その他は組織・連絡・宣伝・総務などを分担し、その下に数人の幹事を設けて各組

分担はそれぞれは厳格ではなかった。私は名目上書記を兼任していたが、具体的活動はほかの人が分担しているの

でかえっていくらか楽らくらいだった。同盟員ははじめ二、二〇人にすぎなかったが、その後次第に増えていった。}

孫席珍は成立の日を三〇年十二月中（後に翌年一月初めまでその可能性の日をひろげる修正をした）とする。これ
は張大明・王保生『三十年代左翼文芸大事記』の記述十二月十六日と重なる（この説の根拠不明）。又成立会で選ばれた常任委員五名でその他の記述も張、大の年表は孫の証言を採用している。前項でのべたように成立を一九二一年二月とした紀元も、そのほかの常任委員の記述にのはぼ孫の証言を採用している。確かに孫の回想は具体的である。だが、実際には孫の証言はそれほど信頼性が高いというわけではない。たとえば、名目上とはいえ常任委員の中で孫の記に孫がなったということに回想の中で触れているものは他に誰もいない。また五人の常任委員についても孫の証言とそのままでしまう発言はない。逆に、孫が何度も引く楊剛については、楊鐸如は「楊剛（当時楊績といった）は当时党内でそれほど重要な役割を担っていない」として、「誰かが北方左翼の史料を書く時には、有名な楊剣を突出させ、彼女の名前をついて自分の把握している材料の信頼すべきことを宣示しているのではないか」と書いているが、これは暗に孫のことを言っているようである。

（3）李俊民の証言から

一九三〇年の前半、私はもともと淮陽で教鞭をとっていたが、蒋風戦争がおこって学校は休校となり、開封に

「北方左翼」について
ととなっていった。その頃既に上海で全国左連が準備されているのを知っていった。当時開封には招勧じょか派等
（漢華）などの友人がいて、北方でも左連の組織ができなければならぬといういはじめ、私に河内一中へ行って講演する
ように求めた。この時の講演は王闇四同志（その時学生だった）が聴いている。これが左連準備問題とかかわっ
た最初だ。∥三〇年夏休み私は故郷に帰った。失業状態だったところへ、未名社の発起人の一人台静農が、私を
北平の翊教女子中学の教師と郁文大学の講師に推薦してくる。同じころ北平にやってきた私の友人は潘訓、段
雪笙などがいる。丁度左連北平分盟を組織する準備の責任者の一人だった台静農は、輔仁大学の教務長であり、
高等教育の世界で一定の地位にある、公然とした活動がしにくかったので、具体的責任を負ったのは、実際は潘
訓で、彼らは準備処機関活動をつくりあげ、九月に私に秘書長の肩書をひきかせた。私が機関にいた期間
は長くなく、接触した人で思い出すことのできる人は数人しか残っていない。
李は確かに孫の証言どおり左連の準備を担当したことがある。李の証言から、北平での左連の準備にあたった人々
の中に開封に集まった段、李らのグループが一つの潮流としてあることが浮かびあがる（彼らが教師であったこ
とは、孫のいう若くてまだ一定の社会的地位（社会関係）があることで孫が主席に（後に書記）推されたことと
原理として対立していると思われる。北方左連の基本的性格がどの辺に定められていたかということと微妙な関係し
てくる問題であるので後にまた触れることにする。}
時期の問題にしばろう。李は三〇年の夏休み後、九月を準備期間であったと証言している。ところが一体この期間
何を準備したければならないのだろう。上海の『左連』ではどうだったか。一九二九年十月ころからという説もあるが、党内での思想的準備、魯迅との折衝を含めて二ヶ月前後であったかと思われる。革命文学論争という歴史的にはプラスと評価してよいか知れぬが、具体的な作業においては負の遺産も含めて同闘争の道は、本来二ヶ月位で掃き清められるものではなかったろうが、両者にそれぞれ危急の時という強い認識があった。プロレタリア作家同盟ではなく左翼作家としては新たな機運をあたえたからだ。一方、北方左連はどうであったか。すでに上海で『左連』が成立しており、北平には還れを取ったというが、北方左連の準備期間（醸酵期間では）はそれほど長くいなかったとも思えない。この点に関しては即座に日蓮を超えていたことか。

李俊民は、当時の関連を知る健在者のリストを付している。それには、劉尊棋（責任者の一人）、孫席珍（準備の三人の名をあげている。孫について書記であったとは書いている。彼の一人のうち劉尊棋はどちらの回想でも責任者又は執行委員にあげられているのだが、今日まで北方左連について何を証言していない。
は後に述べるが、李俊民を成立大会後の二番目の秘書と述べていた、孫、李二人の回想と異なっている。

（4）丁景唐の文献と楊錫如の回想

すでに名称についての章で紹介した『中国左翼作家連盟北平分盟的成立及其行動綱領和理論綱領』の中には成立大
会の模様を記した部分がある。

成立会は一九三〇年九月十八日午後二時に開かれた。会に来たものは三十数人。開会が宣せられた後、赫赫、
縄如、章張の三人が推されて議長団を構成した。まず鶴陶が「左連」北方部の準備経過を報告し、続いて雪声が
北平準備経過を報告した。つづいて無産政党、アメリカーヌーマッセーズ社、反帝同盟、互濟会等の代表が演
説をした。次に準備会が起草した綱領及び宣言を承認し、執行委員七名、候補委員三名を選出した。その後提案
を打つことが承認され、組織を発展させ、狭隘な方式を打ち破り、労苦せる大衆の参加を歓迎するなどの決議を
通過させた。

この文献の出現在、楊錫如の回想録の重要性を飛躍的に高めたと私は思う。まず一部を引用してみよう。

一月七日以前ののはずだ。というのは成立会が開かれて以来もなく、同盟員を動員して十月革命記念日のデモに参加
はいまい。というのは関錫山の勢力が北平を退いてから後、合衆のコードを着たところだったからだ。多分十
国会衆議院の講堂であった。／まず各大学の中学校にあまねくポスターを貼った。それには当日午後二時殷夫先生を
招いての講演がある。場所は平大の法学一院講堂、下に「文学研究社」と書いてあった。このような半ば突撃
のようなやり方、つまり、午前中にビラを出して、午後に会を開くという、のには原因があった。早すぎる故憲
兵、警察、スパイに破壊されるし、これからおそれば人を集められない。そこで半日の時間とロコミによって
丁度よくなるのだ。特に青年学生は、誰かが文学の講演をすると聞くと先を争って入場した。だからその日、会
場は聴衆ではとんどうめつくされていた。／「文学研究社」の名目で講演会を開き、それに乗じて左連を成立さ
せることは、私は事前に知っていた。／「殷夫」先生講演のビラが貼られた時はおかしいと思った。
ののは、その一週間ほど前、上海の徐殷夫、即ち白莽とは手紙のやりとりをしたが、北上するとは言ってなかった
からだ。しかし考えてみれば徐殷夫と明記してあったわけではないから、多分殷夫だけだろう。どうせ地下闘争
では敵をあざむく為には、どんな方策を使ってもかまわないのだ。（中略）左連が正式な成立を宣言した後、
名簿は発表されなかった。（中略）左連が正式な成立を宣言した後、王文正が中国共産党北京市委を代表して講
演をした。
人であるほんのがなく、多くの来賓の発言や数々の決議、執行委員の決定についてなど、資料には書かれていないが、
楊の記憶には無い。それはかりか、共産党代表の話が済むと会は散会し敵に発覚する暇を与えなかったので成功だった
と楊は書いている。三人の発言で議事は終了したとなるのである。この成立の記事（資料の性格）は、恐らくは、「拓荒者」一巻三期に掲載された
文書の役割を果すことを利用した文章である。従ってたとえば事前に準備されてあって、当時は形式的に済ませたもので、当日のこととして文章に盛り込むことを排除しない文章である。と推測するならば、楊の回想録との関係
はほど近いが、当面両者は一致していると考えて次進むと思う。
楊のこの回想は、もし前の資料が出て来ないならば、他者の証言とあまりにも異同が多いために、根拠すべき資料としては誰からも採用されなかったであろう。楊は成立大会以後の「九人の執行委員」について語っている。段雪
箋、潘訓（漢華）、謝冰濤、張璋、梁興、劉尊棋、鄭超、張子成である。彼が、「十四八九九がいない」
と断言するこのリストの中で、先にとりあげた人々がいるのは潘訓と劉尊棋のみである。一体この相異なる記憶を
我々はどう考えれば良いであろうか。いついかが誤っているのか、あるいはどちらもまちがっているのか、そして又いずれ
も正しいとするのか。仮にいずれも正しい（勿論部分的誤りを含んでいることは認め）すると、成立大会は
二つ行ったことになる。その後の両者が並存していれば組織は三つである。がその後の組織が一つであることを見
三・二度の成立大会

成立大会が二度あったことを認める証言は、もちろん今のところ現れていない。しかし、内容の重ならない二つの成立大会の記憶があることは事実である。そして回想記の中には、詳細に読むと二度の成立大会のあったことを暗示しているのではないかと思われる（少なからぬ見つめて、否定はしていな）。部分があるのである。それは一つが陳沂の報告である。

（1）陳沂の報告

陳沂、一九二七年生まれ、現上市委員会副書記、宣伝部長。一九三〇年冬上海から北平に来て、北平文化総同盟党団書記。魯迅の北平行の折、北平文総同盟団を代表して魯迅に報告し、指示を仰いだという。今彼はその時の報告を再現して次のようになる。

私は一九三〇年冬上海から北平に来て、北平中国大学のある同志の家に滞在しました。この同志は北平社連の責任者の一人で、彼の紹介で、私は北平左連（中国左翼作家連合北平分連）を代表して左連北方の代表大会に参加しました。その時、参加したものは潘訓（北平大学女子文理

「北方左連」について
表向きは会食ということにし実際はその蔵で会を開きました。会では、左連の盟章を発せ、活動・任務を承認し、「分盟に所属する支部を建設し、同盟員を拡大することについてのほか分
盟機関誌を発行し、大型文学誌の刊行を準備するなどの討論を行なう。」

会において選擇の機会が三〇年冬北平に来て、北平左連に加

わたった。委員の分担は、潘詠之が常務理事、張秀岩らが執行委員会を

行員として選出しました。全員の準備に當り、私は組織部の幹事に配属され

た。潘詠之が組織部長、楊冰が宣伝部長、劉尊棋が労農通信、張秀岩らが同盟機関誌と文學機関誌

出版の準備に当り、私は組織部の幹事に配属され

った。全員がそれに加われば、まさに成立大会と言ってはよかった。成立

大会って何をしないとならない。成立大会を、執行委員が選ばれた以上、成立の宣

言がこれに加われば、まさに成立大会と言ってはよかった。陳はそれを注意深く

模様にほほ重なる。三一年一月（又は春）成立大会説は極めて有力になる。陸

万美が会への出席者を初め二百人と書い

ておきながら、後に十数人と訂正したのは、恐らく自身の記憶の中からの修正である

のと。べてて陳は三〇年の冬に北平に来たのであるにかかわらず、孫席珍のいう成立大会について何も触れていない。
「北方左連」について

 Boxing on the philosophy

 "北方左連" is a nature-based reading.
合意外にこのことが忘れられる場合がある。たとえば陳沂の報告の中で、一九三三年当時の自分については、北方文
総の党団の書記と記載しながら、「北平左連」については党団について何も触れずに潘訓らを執行委員としている。
これに対し、三一年春、陳沂が所属したという「北平左連」の組織部長だった馮毅之は、その回想の中で、「北平
左連」の成立ごろ、左連党組は、潘訓（書記）、張大姐（組織）、馮毅之（組織）の三人で構成され、陳沂は組織部で活動していたとする。と
すると、陳沂のいうように、「左連北方の代表大会は党内の会議である」とす
べて別ですが、おそらくそんなことはないだろう。すると、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
えれば、実際には殆ど党内で処理しながら、大衆組織の体裁
を保つために「名目上」の書記を置いていたとも考えられ、孫の証言もあからさまに無視できない存在となっ
てくる。その考
北方左連の成立大会を無視ないしは否定している点は共通である。
いったいなぜこうした現象が生まれたのか。この両者の間にはいったい何があるのだろうか。次は潘応人的回想から検討してみよう。

潘応人は、北方左連の中心人物潘訓（漢華）の弟である。成立前後通信活動などを手伝っていたことは前に李守章の言によって紹介した。潘応人は言う、近頃、北方左連を回想する多くの文章が潘訓すなわち潘漢華烈士をとりあげる。けれども段雪笙をとりあげる人はまったくない。だが実は、最初の北方左連秘書（左連書記に等しい）は段雪笙同志である。段雪笙とも書く。その他に一人北方左連初期の活動家張璋同志、つまり張璋烈士、本名張鼎和、安徽合肥の人、段雪笙同志とも同じ中国で後故郷に帰り、農民武装起義を組織し、国民党に逮捕された後義勇となった、に対してもとりあげる人が少ない。

潘は「近ごろの」回想記で、第一の秘書であった段雪笙同志のことは触れていないうち、同じく初期の活動家張璋をとりあげないことに不満の気味である。段については後にとりあげることにし、先に張璋についてと言えば、楊鎧如、清末の両江総督を祖父とする張が、金に不自由せず、風采も堂々と、義にあつく活動にあふれた人物であることを挙げ、西南出身の彼は、同郷の作家、李奮野、韋叢菊、韋素園らと知りあい、彼らを通して曹靖華、范文三ー九
先の孫席珍や李実民の回想では、孫席珍は、一九三一年当時の北平分盟が有名作家がいせず、自己の出版物も出ないということもみじめた情勢の中で、後に同僚の張璜、未名社の台静農、聞素園、李積野らに左連を支持してもらうようつけることに成功したとしても、一体何の情報が変わっているのですか。左連の活動状況が本当に変わるのは、一九三三年に入ってからであり、その時には張璜は既に故郷に帰って農民蜂起に立ち、あはり、院子を隔てて叔父や甥と武装して対戦して故郷の人々を驚かせていたのである。従って陳沂の主張には疑問が生じるのだが、張璜が共同戦線の活動の推進者であったという、役割における認識では一致していることを確認しておこう。

さて潘の回想記に戻ると、＜＜段雪締に＞＞続いて北平左連の秘書をつとめたのが張哲之大姐、つまり張秀岩である。＞とある。この張秀岩が秘書の時期に潘自身が組織幹事になっていたとする。そしてそれは九・八の前後（一九三一年）であったという。
東洋文化研究所纪要

昭和第十七冊

二六年孫炳文と広州行き革命に参加、四一二後孫は犠牲となり、段は逃れて上海で地下闘争に入る。当時上海の利群書店から小説を二冊出したという。三〇年三月十六日、葉永蓁と魯迅を訪問。五月十一日再び林鶴嶽、荀克嘉（甥）と魯迅を訪問している（魯迅日記に記事）。二〇年の三月といえば、「左連立」成立後のことである。五月の訪問では、魯迅と北方に文学の陣地を開くことについて語り合ったという。又その日、段は（極）代英が肺病にかかった死んだという。以上この論文の要点を紹介したが、ここでは、段と魯迅の交流の他、北平左連を組織し、北平文統を組織したのである。示されているわけである。即ち、党の命令と魯迅の指示乃至は賛同を経て、上海から北平に左連を組織したのである。
だろ。以上多くの疑問が残りながらも、有力な仮説として今後検討されなければならない。或は、洪霽菲提唱説も

そんなところに根があるのかも知れない。

会党派立って、会党事実を和政の中心に一体何があるのか、北平と、という異った場所でこの政策が実現されようとする時、その内容の共通性は異質性を検討する絶好の機会となる。北平と上海では無論客観的状況、主体的情報は異なってい

上海と北平での決定的な相異は、会党派と、左翼文学運動の成否に決定的役割を果す可能性のある人物（魯迅、

どのようにが北平にはいないということであろう。しかしそうした場合の中でも、会党派の中心のありどころが見えてくる答である。

の形成こそが究極として求められているならば、もう一つ発想が強く存在しているならば、事態は異なってみえて

きただろう。段が、或は、仮説が成立しばしば、踏まえられたものが何か、もっと詳しく検証できればずである。前述の仮説を重大

だと思われる所以はここにある。

ところ、一方北方左連の側からの、この仮説は重大な意味を持っている。第一の成立が無視ないしは否定され、段

自身まで記憶の中から消されてしまった、その理由に何らかの意味をつけるかもしれないからである。北方左連が、上

海から派遣されてきた人物に指導されることを拒否し、自前の左連を作りという論理が働いたとすればである。人々

の心理の中に、会党派と海派的対立意識がしばしば、だろ。或はそれらが理性によって抑えられていたにしても長い間にそ
九三二年末から三二三年にかけてであることは先に述べた。そこで今回されている大きな違いは、執行委員の顔ぶれが変わったことになる。

丁景唐の資料には、成立大会で七人の執行委員と三人の候補委員が選出されたとある。カフェは、執委委員の名を九名あげた。そのうち第二の成立以降も活躍を続けたものは二人（常訓、劉尊旗）のみ、残り七人のうち、段雪笙と張煒については、潘応人によってもその活動が確認されている。残ったのは五人、そのうち二人が女性である。そのうち一人の女性は謝晶体である。謝は北方左連中作家としては最も名前が知られていたと言ってよい。彼女は第六期中央軍事学校の出身で、北伐に参加し、彼女を体験を小説『從軍日記』に書いて有名になった。北伐が挫折したのち、家から逃れて上海に出、阿英の紹介で上海芸術大学に入学した。軍事学校の同窓生で文学青年の符号と恋愛し、一九二九年に一緒に天津に行き文学活動を行なうが、北平女子師範に入学が決まると単身北平に移る。北平師範の教え子であり、符号逮捕後その子供を自分の家に預かっていたのをよくやってきては、孫や楊剛と左連の活動について、力をこめて討論したが、しかし一人もしないうちに、彼女は突現符号を表すの母親のところへ送り届けるとひとりひっそり南方へ行ったと書いている。
孫の家に子供まで預けていた謝がいった。どういう理由で南方に去ったのか、孫は説明していない。しかも左連に
ついて力をこめて議論を交わす謝が執行委員であったかどうかについても一言も触れていなかった。
南下した謝は、六月ころ上海に現われ、「清算」という小説を書いていた。このことから北平を離れた理由を
との破局に求める説もあるが、符号はそのころ獄中に入っていたのである。謝は九一期前後に東京へ行き、そこで廃墟、胡
風らと左連東京支部の結成に参加しているが、ほとんど何の活動もないまま、九一期に抗議して帰国する留学生と
ともに帰国、上海で中国革命婦女大同盟を組織する。一九三二年一月顧鳳城と結婚、その新婚の宴には、馮雪峯をは
じめとして丁玲、適夷、寒生、何畏、英蒂、燕子、鄭伯奇、穆木天ら上海の左連と左翼の作家が出席したことが「文
学新聞」に見えてている。その後顧鳳城と再来日して留学し、竹内好らと交流があったことはよく知られているところ
である。
さて楊鍾如は、その謝が「一九三一年初め非常委員会の指導する北平市政委準備処に参加し、準備処分子として党
を除名された」と証言する。そして残りの三人の執行委員のうち、燕京大学の学生で支部書記をやった張郁案も、執行
委員となっていなかった。謝が「一人ひとつも一南下した主な理由はここにある」とするという。準備処分子は準備処分子で
あるが、彼らに対しては隔離措置をとるという。隔離措置が具体的にどういった措置をするのかは想像できる。
さてもう一人の執行委員は、活動的なことでは張璋にひけをとらぬ、北大心理系の学生案笑笑であるが、彼は準備処が分裂活動をはじめると、闘争の複雑さに悩んで意気消沈している。保定の親元に従っていなかったという。そ
の後又活動の部処に戻ったが、党との関係を失ってしまい、今だに党籍の回復せぬままになっている。彼はそした

後、九一八以後に北平を離れたというだけで詳しい経歴は語られていない。

が、九一八以後に北平を離れたというだけであって、共産団員ではない。

連を支えようとしていたのだと言うことがわかる。彼は自分が多かったこと、革命的な作家の少ないことを

だと、潘訓に取消主義的観点だと面とむかって叱責されたという笑と笑ゆずる話でも、この組織の.gca

いた困難を象徴的に表現している。しかし我々にとって注目すべきことは、そのくらいに限り二人が準備処問題

北方左連成立後、それに組織的動揺を与えた準備処問題とは一体何か。なぜ彼らは我を閉ざしているのか。

北方左連について

「新文学史料」の楊織如の文に対し、張績如に関する楊の記述は正しくないと主張する業書が「新文学史料」に出

彼はこれによって北京市委員兼西郊区委員書記に抜擢されたのだと、この投書に答えて、楊織如は次のように反

「北方左連」について
論している。

張部長が準備処組織に参加したことは、絶対にまちがいない。（略）立三路線の時には、部長が極左政策に反対意見を出したと書いているが、これはそのまま、部長が準備処活動に参加したことを示す重要な証拠である。

北京市委だったときは、しっかり覚えていない。六期四中全会非常委員会、北平省委、北京市委幹部は、通常北京省委や北平省委のことを指し、我々は略して「準備処」と呼んだ。これは即ちいわゆる第二中央、第二省委、第三市委のことを指す。我々が準備処が認められなくなったと、我々が準備処を呼ぶに至ってある。

謝や張部長がどうして除名されることになったかを整理するとき、これは四中全会以前の組織の指導する新しい機関からみて第二〇〇〇とは言われる形で準備処となったり、機関を維持しようとしたが、これが四中全会以後の中央の指導する新しい機関からみて第二〇〇〇とは言われた。やがて四中全会中央に従う新組織が強勢になる。準備処と反立三路線運動との関係はどうか、楊は続けて次のようを言う。

局の証言の信憑性について検討してみよう。準備処問題については書籍はその後に説明している。
当時北方順直省委幹部は、王明が登場するのに反対し、羅章龍一派の韓連輝らは分裂活動を行ない、もとの省委をマヒ状態に陥れ、別に新省委準備処を組織して、公然と四中全会反対をいいたいした。

委員会をマヒ状態に陥れ、別に新省委準備処を組織して、公然と四中全会反対をいいたいした。

于吉楠の立場は、王明派にも羅章龍派にも反対する「関于若干問題歷史問題決議」の位置に立つと思われる。これで反立三路線運動が、四中全会以前から行なわれていたことについては触れられていないが、評価でなく、事実の問題だけから言うならば、楊の証言とは重なる。

韓連輝は、早くから広中央委員であり、一九二四年の民國党改組の一全大会でも、中葉選挙で候補執行委員に選ばれているという。韓連輝は北方局の指導者を韓連輝といい、楊は韓連輝といい。両者は果して同人人物なのであろうか。

一九二四年の民國党改組の一全大会で、中葉選挙で候補執行委員に選ばれているが、大学教授派」と呼ばれ、遅くも三年末には広中央委員であったかどうか、広中央委員で新たに中央委員に補充された者の中に韓連会の名が見え、同人としてよい、(unittest)

李俊民（三番目の秘書又は左連準備処秘書長）が謝について触れた中に次のような部分がある。

「北方左連」について
近で組織を離れた。彼女が当時連絡をしていたものに符号と馮潤璋などがいて、その頃の左連のメンバーだった『というのである。林語堂との関係はよくわからなくが、馮潤璋はたしかに「左連」の成立大会のリストにもその名の見える人で、彼自身天津での活動については次のように書いている。

一九三〇年冬、党中央は私と許権中同志を天津に派遣して反立三路線工作をやらせた。〈中略〉私は天津に行きると反立三路線工作のほかに天津左連を検閲する任務を負った。天

沢意見を述べた。私は天津に置いてからも左連の座談会を開いた。責任者は張という同志で天津左連の事情を説明し、皆がそれぞれの意見を述べた。私が上海を離れるとき胡也頻同志も上海で逮捕され、その後上海の龍華で犠牲となった。

法廷で私が共産党員であることを証言した。そこで「一九三〇年冬」に天津に左連があったこと、党中央から派遣されたものに検閲があったことが記されて

いるが、それよりも党内闘争の複雑な事情が語られていて注目される。六期三中全会から四中全会前後にかけての党内各派の闘争の複雑さは、とてつもない門外漢に把握するべくもないが、各派ともそれぞれ反立三路線を主張していた中で、馮潤璋の立場はいいたいどうだったのか。彼のいう党中央の誰をさすのか、未だに決めかけてある。

馮はこの事件と胡也頻逮捕とを一連の問題として関連づけて叙述しようとしているが、各派ともそれぞれ反立三路線を主張することをめぐって組織の関係が矛盾なく繋がることになる。
北方左連」について

【北方左連】について
東洋文化研究所紀要
第十九巻

一四

失った反革命右派分子として憎悪をもって語られているのであり、とりわけ第三党を組織したと言われた人々は、中央とおりあいが悪く、反中央の行動も根強かったため北方局全体が取り消される事態にまで発展したというか、準備処にまつわることも、いまわしい記憶として残り（或是記憶から消され、語られない部分になったかもしれません）。現在中国でもいうほどの発展はいちろくないようになり、六期三中全会から四中全会前後の複雑極まりない「党内闘争」の通過に関する論文が一般研究誌に掲載するようになっており、こうした情勢の変化が、楊銓如に対し、いち早く準備処問題に触れ

張懷堂の反論をみてわかる。楊自身も充分承知の上で書いているのだ。楊はいう。「私は張懷堂が準備処の活動に参加したというのは事実もとついて話したにほかならない。なぜなら準備処は当時
以上、党内問題に対する検討は、指導の関係もあおり一まずここに終える。堂々めぐりに見えたであろう私の作業は、回想記相互の矛盾を解きほぐすために必要な手順にすぎないと考え、かいが無いとも言えない。

以上の検討を通じて私は現在以下のように整理して提出しようと思う。

①北方左翼は必ず一九三〇年九月八日に成立した。②段雪生、潘漢生ら、上海から来た人々が組織の中心に位置を名されている。执行委の中には運動に挫折するものも出た。③北方左翼は一九三三一中会中央による北平での再組織がなり、準備処運動に参加した謝、張らが除かれ、党内闘争が強まる中で、北方答立三人反中央の傾向もあり準備処活動がおこり、北方左翼の執行委の中にもその活動に参加したものがあった。

以上のように整理されるから、北方左翼の研究は当然のことながら第一の成立から始まるわけではない。
四、終章にかえて

北方左連は、北平という歴史的、政治的、文化的に上海とは条件の異なる地にあって、しばしば「左連」の支部（分盟）と呼ばれたことはあったものので、全体としてみれば、独自の組織として存在し、収束した。だがあその成立に関しても、北方左連は独自に上海にならって成立させたのかという組織上の問題については、今しばらく結論を留保するにしても、いずれにしろ「左連」にならばという点はっきりしている。そうであれば、いったん北方左連の目的にに関する部分は次のとおりである。

（A）われわれ文学運動の目的を求める新興階級の解放。（二左連＝行動綱領。以下(B)とする）

（B）我們文藝運動的目的在求新興階級的解放。故必須參加無產階級所領導的革命闘争——蘇維埃政權闘争。（北平分盟＝行動綱領。以下(A)とする）
文面からBが(A)を参考に書かれたことは明らかていない。『新興階級』と『普羅階級』とは、当時どちらも同じこと
を指し、相互に代替して使われたが、『普羅』が直接の言訳であるだけ、合法性に気を使わない使い方だったかも知
れない。『文学』が『文芸』に変わった点は、活動領域を拡大することを意識したことと思われる。
問題は後半の
つけ加わった部分だが、ここには、当時の李立三路線の政策が直接表現されているとみられ、
綱領における重要な変
更点の一つである。

だが、『左連』の『八月決議』には既に次のような記述がみられるのである。

世界全体が革命の前夜にあり、特に中国革命の高揚期が来ようとしている。我々は中国が必ず帝国主義と
最も残酷な闘争に遭遇するであろうし、同時に全世界の革命の高揚をひき起こすことと思われる。問題は後半の

最も残酷な闘争に遭遇するであろうし、同時に全世界の革命の高揚をひき起こすことと思われる。問題は後半の

李立三の指導する当時の中央は、コミンテルンの支持を得てソビエト共産党の政治的、経済の支援を受けて、
自国革命の成功がとりもなおさず帝国主義の滅亡である以上、我々の前には勝利か現れず死かの事実しかない

で変

dから無産階級文学運動はソビエト共産党のための死活の闘いをしなければならない。ソビエト文学運動は、今か

で変

dから無産階級文学運動はソビエト共産党のための死活の闘いをしなければならない。ソビエト文学運動は、今か

で変

dから無産階級文学運動はソビエト共産党のための死活の闘いをしなければならない。ソビエト文学運動は、今か

で変

dから無産階級文学運動はソビエト共産党のための死活の闘いをしなければならない。ソビエト文学運動は、今か
活動課題についてみてみよう。

(A) 出版機関関係者、編集者が、文学作品を創ることに携わることをいう。(B) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(C) 出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(D) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。

(A) 出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(B) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(C) 出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(D) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。

(A) 出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(B) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(C) 出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。(D) 建立出版機関、編集者、監督、小説家等。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。従事者、生産者、新興階級文学作品に携わることをいう。
奮戦しなければならず、『タブーを避ける』や『合法』などの観念があることは許されるとも明記されている点な
どから想像できるように、同一の考え方で、一方では現実のありがちな活動に対する批判として働き、一方では組織
の性格を規定する根本原理として働くというように果した役割の違いは大きいと考えられるのである。
以上『新報』の文面を見たわけだが、具体活動ではどうだったのか、成立時期に活動した人の回想記から、一、二
拾ってみよう。潘広人は次のように述べている。

あの頃の我々の活動で、より多かったのはやはり国民党との闘争だった。革命的記念日が来るたびに各左翼文
化団体の同志はみな飛行集会やステッカー貼り、ビラ拡げ、デモ行進などに参加しなければならなかった。この
ような活動の方式は正に立三路線の産物であり、取るにたらないものであるが、我々の時代の青年に与えた影響
は極めて深いものであった。

潘広人は、当時の運動全般を観った傾向を李立三主義の影響として概括し、北方左連の活動も例外ではなかったと
しているわけだが尚かつ、それが当時の青年に与えた影響の大きさという点で左連の活動を肯定的に認めているよう
である。

北方左連が『半政党』だったという馮毅之も行動の形式に基づいて同様の回想をしているが、更に当時の青年たちの
心理について次のように語っている。

こうして会員の革命性と無産革命に対する忠誠心が検査された。五月になることに『红色五月』と言って、同
志たちは緊張し、興奮し、又心配にもなったが、逮捕されて監獄に入ったり犠牲にしたりする心構えをしなけ
ればならないかった。

【北方左連】について

一四七
このような活動の実態については、柳瀬Assoc。も、北方左連の成立直後に十月革命の記念のデモ参加を呼びかけたとあるから、最初からのことと考えて良いだろう。しかしこのようにも見れば極「左」的と言える活動を、全て李立三路線の側物といっていたことも、次のようになる。路線の側物といえば当然のことであるが、著者の見解は、革命実践と革命活動が非常に強調された。文学理論が私に与えた印象を最も強くもののは、無産階級文学を書くには自分がある無産階級の革命人的家（家）になければならないというのだった。

一九二七年大革命時代、魯迅が「革命文学」の中で述べた言葉、「私は根本問題は作者が「革命人」であるか否かにあろう。一つの逆転は、革命文学論争を経て「左翼」と成立したことが、歴史的意味に触れ内容を含んでいて、直ちにここで述べる準備が無いか無いかだ。魯迅の思想を私に与えた印象は、何かとも違う。そのことから、北方左連が「左翼」の影響を受けるのは、もうそうであるかけれども、この時左翼文学が同時に受けた影響、いかければ、魯迅の思想がこのような形で広く左翼文学に影響を与えているからだろう。
線の影響とかづけてしまうことには疑問が残るのである。

馮毅之は前の引用につづけて次のように言う。

もう一つ私に深い印象を与えた文学論は、作家は労農兵大衆の中へ行き、彼らを観察し、彼らを理解し、彼ら

いった。

馮はその後同じ考えから、部隊に参加したり、農民になったりしながら、革命と文学の間で闘いをつづけて今日に

至った。北方左連の圧倒的多数が青年学生であった。その全てが人力車夫や農民になったのでは無いこととはいうまでも

ないが、当時の文学運動の目標した方向が、単なる政治的共産文句で決まったのでは無いことを、我々に確認させる述

懐である。今日から言えば、又は異なった文学環境から言えば、いか様にでも批判の余地の残る活動内容が、常に

存在し、革命、革命人における文学の問題において右のようにおさえた上で、おおかた北方左連の自由思想と活動

に関しての李立三路線の影響という問題について考えてみたい。「共産」によれば、全国ソビエト政権の勝利に全て

の力を集中的という政権の課題（李立三路線）、いわゆる当時の情勢認識から生まれた政策（方針）に従うか、いかにして

政治、革命、革命人における文学の問題とし、前方に伸びるという点で、政治、革命人、革命人における文学の問題と

ことになる。魯迅のいう「革命人」、「革命人」は、内部にその革命を有しているということができると、

「北方左連」について

「四九」
東洋文化研究所紀要

三十七期

五〇

びついたのだが、ここでは、それがある一時期の党の政策に従って方針をとっているという。それは選択する自己の内部過程を考えるため、内なる革命がどこまで進展されるかについての確固たる方針を取ることがある。党の政策はあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかし、党の方針をあくまで激進的な内部闘争は、当然それを掲げていた組織の中でも同じ平面で、同じ水準で行なわれたであろう。しかしこれが上のような事情の要因の一つとして数えてあげられるのだが、一方向では、成立時の組織の性格付けの問題がある程度の既制作家、乃至は知名作家を組織の中核に据えられなかった。前にあたったかという現実、すなわちその結果として生じた事態として、もとからおかなおなれなったのが、どういう対立となって現われたのだろう。楊箑如は次のように述べている。発起人名簿についてだけ言ってしまっても、上海の左連は魯迅を先頭に大勢の知名作家が名を連ねている。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時において既に知名作家であり、今日まで文芸部隊の元祖である。指導部の執行委員も当時
北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連は党の方針が最も極「左」的な時期に誕生した。その影響は運動の一層の尖鋭化へと繋がった。

方針の変化（極「左」化）及びそれに続いて進行した党内部争の影響も考えねばならぬ。

北方左連
東洋文化研究所紀要
第十七冊

一九三五年から三六年初めにかけて組織が再建され、運動は再び活発化する。一九三六年は「左翼」解消の年であり、北平でも解散、組織の結成が目指されることになる。二つのスローガンをめぐる論争、解散問題はここでも対立した新組織「北平作家協会」は十一月まで持ちこたえ

われわれ北方左翼の後半の活動においては語るべきことも多いが紙数もきいたので別の機会に譲ることとしたい。

その成果（作品、雑誌、作家）について殆
「北方左連」について

本文の内容は、日本での事情が多少異なるであろう。だが北方左連の機関誌は、それには準ずるものがある。中国で創刊された等の話も聞かない。「文学雑誌」と「文芸月報」のシリーズ版が出版されている。

今の私はこれらの回想記を読んでいる、これらも北方左連の運動が明らかにそのような重要な役割を果たしている。北方左連の活動は長い間閣にうかぶにいたが、今半世紀も過ぎて果たせぬ花を咲かせている。それらを越えて、記憶をつつきあわせることにより、事実を確かめようと執念に燃えている人々に感謝を捧げずつ、いささかその交通組織をしながらのことを意味するわけではない。

1. 「秘書発消息」第一期（一九三五年三月〜五月）
2. 『文学生活』第一期（一九三四年一月〜六月刊）
3. 『新文学史料』一九八一年第一期所収の『無題月計画』に、一月の「一般的計画」の四番目として「各地の、少なくとも下記の分野との関係を回復するか、もししくは作りあげ、指導を強める。」

南京、北平、広州、武漢、東京とある。天井が記されていないのは(?)支局が存在していないか(?)関係が緊密で良好で
東洋文化研究所要覧
第九十七冊

五四

一九三四年に天津で「現代文学」を発行した王余杞の「記念文集」『新文学史料』第五輯所収、によれば、上海で左翼の文章が発表できなくなった状況で、国民党的支配力が比較的弱かった天津での発行が企てられた。この企てには上海の宋之的関与していた。その後の活動は殆ど王余杞一人の手で進められたことが書かれている。そうしてみると支部はなかったがい。左連との関係はあったということを考えられる。

北平左連及び北平作家協会の成立に関しても孫席珍が「関于北平左連的活動」に論じている。北平左連の成立を知り、北平左連のあり方を北平の特別党組（陳伯達がリーダー）で討論し、北平局の指示を仰ぎ、『中国左翼作家同盟成立大会の指名員名簿（仮写稿）』（中国現代文学史料、第五輯所収）には「左翼作家在上海芸大」（新文学史料、一九三八年）の「統記」で「彼がいかなる身分で参加したのかわからない」としている。楊は、「左翼作家在上海芸大」（新文学史料、一九三八年）の「統記」で「彼がいかなる身分で参加したのかわからない」としている。
山の上の風が /

へやの前の花が /

늦게咲ききり /
未発表の手稿によったという。